

神奈川の自然シリーズ 18 草原の保全

たなかのりひさ

田中徳久 (学芸員)

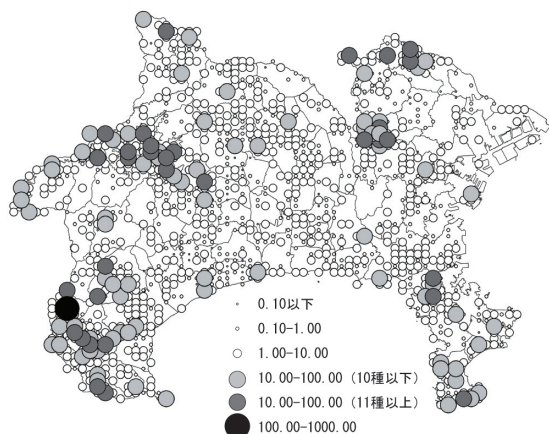


図1 レッドデータ植物の分布得点の分布 (田中徳久, 2005. 神博報 (自然科学), (34): 47-54より).

生命の星・地球博物館では、1995年に「神奈川県レッドデータ生物調査報告書」を刊行しました。植物についてみると、そこには絶滅種133種、絶滅危惧種197種、減少種147種、希少種59種、消息不明種73種の609種が掲載されています。この数は県内に分布する在来植物の1/5～1/4に達する驚くべき数字です。

このレッドデータ植物について、分布の少なさを重み付けした点数を与え、国土基本メッシュ(3次メッシュと呼ばれる約1km四方のメッシュ)ごとに、分布するレッドデータ植物すべての点数を合計した分布得点を示すと、図1のようになります。県内で、もっともレッドデータ植物の分布得点が高いのは箱根の仙石原に位置するメッシュです。

仙石原のレッドデータ植物

仙石原メッシュには、40種を越えるレッドデータ植物が分布し、その多くは湿原や草原に生育する植物です。実は、仙石原のレッドデータ植物の分布得点が高いのはこのためなのです。湿原に隣

接した台ヶ岳の北面には「かながわの景勝50選」にも選定されているススキ草原が広がっていて、仙石原湿原は湿原と呼べる県内で唯一の場所です。この神奈川県では珍しい2つの立地に生育する草原生、湿原生のレッドデータ植物が、仙石原の分布得点を高めているのです。

ここでは、このうち草原の保全について簡単に紹介します。

草原の保全

県内にみられる面積的にまとまった草原には、丹沢や箱根の山地上部に広がる風衝草原、相模川や酒匂川の河川敷の草原、台ヶ岳北面のような二次草原と呼ばれるススキ草原の3つのタイプがあります。これらの草原は、どれも遷移と呼ばれる働きにより、その場所その場所に適した森林へと移り変わろうとしています。それぞれの場所が草原の姿を維持できるのは、風衝草原では一年を通して吹き続ける風が、河川敷では毎年繰り返される増水が、そしてススキ草原では人間の力が遷移を妨げているためです。

しかし、山地上部の風衝地は別とし、県内の草原はその姿を変えつつあります。河川敷では、上流部でのダムの建設やさまざまな治水政策により洪水が起きにくくなり、河川敷の遷移が進行し、カワラノギクなどの河川敷を代表する植物たちが絶滅の危機に瀕しています。台ヶ岳のススキ草原の場合はどうでしょう。

図2に示したのは、1980年代後半の

台ヶ岳のススキ草原です。濃く見える部分は、草原に侵入してきた木本類です。ススキの株も大きく、背丈も高くなり、そこに生育する明るい草原を生活の本拠とする植物たちは行き場を失いはじめていました。

ススキ草原は「茅場」と称し、ススキを牛馬の飼料や茅葺屋根の材料とするため、牛馬の放牧や火入れなど、人間の力によって遷移を妨ぎ、ススキ草原を維持してきました。しかし、1960年代も後半になると、その需要も少なくなり、人の手が入らなくなり、遷移が進行しました。当時、このススキ草原をどうするか、さまざまな議論が行われました。そのまま自然の遷移に任せて森林化するのを見守るか、もともと人の力で維持してきた草原なのだから、人の力で草原のまま維持するのか、議論は2つに分かれたそうです。

図3に示したのは、今の台ヶ岳のススキ草原です。濃く見える木本類も少なく、ススキの背丈も低くなりました。現在では、ススキ草原を維持するため、図4のように年に1度、草原に火を入れています。

今のところ、仙石原では、草原を維持し、そこに生きる動植物を保全する方向で活動を進めていくことで合意が得られています。しかし、仙石原以外の地域の小規模な草原は、今も次々に姿を消しつつあります。里山の耕作地の土手などの小草地はその代表例です。

博物館では、「神奈川県レッドデータ生物調査報告書」刊行後、10年を経て、レッドデータ生物調査 part2を進めています。神奈川県の草原の植物の現状はどうなっているのでしょうか。その調査結果が待たれます。



図2 1980年代後半の台ヶ岳のススキ草原。



図3 現在の台ヶ岳のススキ草原。



図4 火入れの様子。